

真実の球

大島
行雲

固く 筋肉を凍えさせる夜

器用に笑う女を褒め称える罪深い宴

生真面目なテロリストは

酒を吐き捨て

過ちを胸に 独り 家路へとつく

みんな 楽しんでる

酒 歌 賭け事 セクハラ

オブラートに包まれた会話

黴菌に汚れた舌で 互いの傷を舐め合って

みんなのようにには生きられない

自分の為に生きてみても 面白くないんだ

色々やってみてるけど 面白くならないんだ

生きる意味を作るのには もう疲れた

的外れの慰めは 軽蔑か屈辱

みんなのようにには生きられない

みんなのように生きる気もない

フィリピン女が待ち受ける町角で

ピンク色の兎が下手なラッパを吹いてる

無機質な扉の向こうから

マックスの泣き声が聞こえてくる

世界のあちこちから聞こえてくる

幸せだなんて 思えない

他人の唇をホチキスの針で止めて

素直に語り合おうだなんて

真実の球は投げたきり

返って来た試しがない

何もかもが 通り過ぎていく

紙袋の中には「愛」と書かれたお守り

でも その意味が分からなくて不安になる

焦って 何度 球を投げても

投げた球は ただ地面に転がってる